
ねこと魔法

愁しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこと魔法

【著者名】

愁しゆう
り

N6837E

【あらすじ】

ある夜、黒猫のクロのもとに魔法使いが現れた。ひとつだけ願いを叶えてくれるとの言葉に、クロは…。

「キリの願いを甘えてあげよ!」

公園の、いつもベンチの上であるくなっていたボクに、そのひとはそう言った。

真っ黒な服を着ているから、小さな外灯じゃ顔がわからない。

なんでも?

ボクがそう訊くと、

「ああ、なんでもひとつだけ」

と、そのアヤシイひとは持っていた杖をクルクルまわした。

…おかしいな、ボクの言葉がわかるの?

「わかるよ。魔法使いだからね」

ふうん。そういう人間もいるんだ。

じゃあ、じゃあ。

ボクを人間にしてくれださい。

そうしたら、いつもボクを可愛がってくれるあのひとと、お話をできるから。

「キミの願い、叶えよう」

キラキラと杖の先からお星さまが散った。

いつも夜の空を見てるけど、こんなにキレイなお星さまははじめてだ。

眩しくて、目を瞑つても瞼の裏が光つてた。

「…あれ？」

目を開けると、魔法使いのひとはいなくなっていた。

パチパチと瞬きして、手を見ると…

「人間の手だ！」

ボクが叫ぶと、ベンチの下にいた三毛猫のサナさんが、『なう』とひと鳴きして走つて行つてしまつた。

…あ。人間になつたから、サナさんの言葉がわからなくなつちやつたんだ…。

ちょっと、ショック…。

一本足で歩くのって、なんかオカシイ。

よたよたと歩きながら、何度も通つたあのひとの家に向かつ。

堀に登つたり、屋根の上を歩けないのがとつても不便だ。

だから、人間は乗物に乗るんだなあ。

でも、車にはボクの友達が轢かれたからキライ。

古びたアパートの一階の奥の部屋が、あのひとの家。

ボクにミルクなんてくれる余裕、ないクセに、毎朝ボクのために公園までミルクを持ってきてくれるんだ。

夜に遊びにくるボクのために、ほんの少しだけ窓が開いている。

あーいる。

ドキドキする。人間でも、心臓がこんなにドキドキするんだね。

「こんばんはっ」

ベッドに座つて本を読むそのひとに、声をかけた。

恥ずかしい…声がちょっとひっくり返っちゃったよ。

でも彼はなぜか恐い顔で、ボクのほうに来た。

「…おまえ、誰？」

声も低くて恐かつた。

「え…？」

そうだった。ボクはいつもの猫の姿じゃなかつたんだっけ。

ボクならこの時間はまだ早いけど、人間はこんな夜遅い時間に遊びに来ないんだ。

ぎゅう、ヒボクは黒い洋服を着たボクの胸元を掴んだ。

じつじよつ、じつじよつ。

「見ない顔だよな？俺になんの用」

「ボク、クロです…」

「クロ…? んな知り合い、いねえよ」

あなたとお話ししたくて、人間になつた…猫のクロ、です。

そういういたいのに、彼がとても怖くて言葉が出ないよ…。

いつも、ぶっきらぼうに変わりはないんだけど、ボクを撫でる手はやさしかかったのに。

…「んな」となら、猫のままでよかつた。

「…なんで、泣く」

言われて、顔を触ると水で濡れていた。

涙？こんなにこつぱい出るの？

「「め、なさい…」」

もう、それしか言えなかつた。

「おいつ」

彼が驚いたように叫ぶ声を背中に聞きながら、ボクは公園へと走つて行つた。

「なああん」

いつものベンチへ戻ると、サナさんが隣に座つて話しかけてくれた。

「「めんね。…ボクにはもう、サナさんの言葉がわからないんだ」

「「やあひ」」

「口ron ベンチに横になつて、小さくからだを丸めて落ちそつたなる足を抱えた。

そんなボクの頬を、サナさんがペロペロ舐めてくれる。

…猫が人間になろうだなんて、間違つてたんだ。

かみさまが与えてくれたからだを変えてしまったボクに、天罰が
くだつたんだ。

もう、あのひととは話せないし、サナさんともお話できない。

ボクはひとりぼっちになってしまった。

人間って、どう生きていけばいいのかなあ…。

「なああうん…」

サナさんのぬくもりに慰められながら、ボクは泣き疲れて眠つてしまつた。

「… ん、 クロ…」

名前を呼ばれながらだを揺すられた。

重い瞼をあけると、朝日が田に染みた。

目がチカチカする…。からだも、なんかギシギシする…。

「… や、 ん?」

無意識に、いつも朝にミルクを持って来てくれる、あのひとの名
前を呼んだ。

「… クロ」

どうしたんだろう？なんか、困った顔してる。

でも、今日は怖くない。

起き上がりたても、からだが痛くて起きれない。

そんなボクのからだを、彼が支えてくれる。

「ありがと…」

ボクはいつもお礼に、彼の頬をペロペロ舐めた。

あれ？赤くなつた。

「…本当に、クロなのか…？」

「…うん。あなたと、お話をしたくて…」

人間になつたの。

「信じられない…」

でも、本当だよ？

信じて、ともづ一度、今度は唇を舐めると、『やめなさい』と咎められた。

…やっぱり、彼はボクが猫のほうがいいんだ。

「あなたが…すき…だから…」

あなたと同じ人間になったのに。

ボクがひとじや、ダメですか…？

からだをすり寄せると、彼は顔を手のひらで覆つた。

隙間から見えた、彼の顔が真っ赤だ。

「ヤバイ…」

「あ…」

可愛かわい、とわくわくと抱きしめられた。

彼の心臓がどきどきしてゐる。…ボクと、一緒に。

髪、真っ黒でふわふわしてゐる。クロだ…」

「うん」

クロだよ。

さすがに、からだは黒くないけど…。

「可愛い、クロ…」

「…うん」

唇、舐めたりするナビ…」こんなふうに、べつにかく喋るといふべ

つたい。

「からだも、なんか熱くて、ドキドキが止まらない。」

とひん、って頭が溶けていっちゃつ。

あああああ。

でも、お腹は正直で、お腹すいたよ~って、叫んだ。

「くく、さすがクロ」

笑った彼は、ちゅうちゅうボクの唇を吸つと、立ち上がつた。

「おこで。俺の部屋で」飯食べよ~」

「ミルク、あるよ~」

彼が伸ばした手を掴みながら、首をかしげた。

彼はボクのために、こつものよつこ黒い器にミルクを入れてきてくれる。

「人間は、これだけじゃ足りないから」

そうなんだ。

じゃあ、ボクが彼の部屋に行つて食べたら、もっと貧乏になら
ちゃうんじゃないかなあ…。

心配して訊くと、大笑いされた。

心配してゐるのにー

「俺は、クロを食べるからいいよ

「？ 美味しくないよ？」

「美味しさ。愛があるから」

愛つて食べられるのかあ。

人間で奥が深い。

「じゃあ、いっぱい食べてね？」

「遠慮なくいただくなよ」

なにがそんなにおかしいのかな？

笑う彼の手をぎゅっと握ると、ぎゅって返された。胸がほかほかする。

そして、ボクは彼と手をつけないで、ふたりで家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837e/>

ねこと魔法

2011年1月19日22時20分発行